

シュトルムの小説と大学（その1）

—— 『グリースフース年代記』について ——

三 浦 淳

1 はじめに

テオドール・シュトルムは19世紀ドイツ語圏を代表する作家の一人である。その作品については従来から様々な研究と解釈が行われてきた。

本論考は、シュトルムの小説作品において大学（大学生および大学卒業者を含む。以下、同じ）がどういう意味を持ちどのような役割を果たしているかを明らかにしようとするものである。

今日の大衆化された大学とは異なり、シュトルムの生きた19世紀ヨーロッパにあっては大学進学者は少数であり一種のエリートであった。フリッツ・リンガーによれば、1885年の段階でドイツの大学進学率はわずか0.8パーセントに過ぎない。¹⁾ シュトルム自身、大学で学び法律家として人生のスタートを切っている。シュトルムの父も大卒の弁護士であり、家系的に見て作家シュトルムは社会的なエリート層として一生を送ったと言える。シュトルムは作家ではあるものの、弁護士や政治家としての活動のかたわらで文筆活動を行った人であり、従来の研究では彼の社会思想にはそれなりに光が当てられてきた。

本論考においては、そうしたシュトルムの社会思想には一定の注意を払いながらも、そしてシュトルム自身の大学との関わり、および当時のドイツ語圏やヨーロッパにあって大学がどのような場であり、大学生や大学卒業者が社会的にどのような位置を占めていたのかに留意しつつも、あくまでもシュトルムの小説において大学がどのように機能しているかを明らかにすることを目的とする。

したがって方法的には作品内在的解釈を中心としつつ、必要に応じて作品内

で扱われている地域や時代ごとの大学の実態、或いは作者シュトルムと大学との関わりにも言及することにした。文学作品は必ずしも書かれた時代や社会を写す正確な鏡ではない。言語芸術作品として社会や時代から乖離した部分をも持ち合わせている。実情に即した部分と乖離した部分、その両者の混交にこそシュトルムという作家の独自性がうかがえるのであり、本論考は文学作品内の大学に光を当てることによりシュトルムの文学的特性を明らかにしようとする試みなのである。

2 ドイツの大学史

「はじめに」で述べたように本論考の主目的はあくまでシュトルムの作品における大学の意味や機能を明らかにすることであるが、その前提としてドイツ語圏における大学史について基本的な事実を押さえておくことは必要であろう。現在のような研究大学の形が確立された19世紀に至るまでの歴史を概観してみよう。

そもそもヨーロッパの大学は12世紀後半にイタリアのボローニャに生まれたとされる。さらに13世紀前半にはフランスのパリ大学とイングランドのオクスフォード大学が誕生する。ヨーロッパにおける大学史はこの3大学の設立をもって始まったとするのが一般的である。

中部ヨーロッパ、或いは広義のドイツ語圏においては1347年に皇帝カール四世がプラハに大学を設立したのが嚆矢とされ、これに対抗するように14世紀半ば過ぎにはクラクフ（現ポーランド）、ウィーン、ペーチ（現ハンガリー）に大学が創設される。さらに14世紀末から15世紀が終わるまでの間にエアフルト、ケルン、ハイデルベルク、ライプツィヒ、フライブルク、バーゼル、テュービンゲン、マインツ、ヴェルツブルク、インゴルシュタット、ロストックに陸続と大学が誕生する。文庫クセジュの『大学の歴史』の著者は、「この時期、ヨーロッパの中で最も濃密な大学のネットワークが形成されていたのがこのドイツである」と述べている。²⁾

ドイツ語圏の大学はさらに増え続け、16世紀にはケーニヒスベルク（現在の

名称はカーニングラードでロシア領)、イエナ、グラーツ、ヴィッテンベルク、フランクフルト・アン・デア・オーダー、17世紀にはキールとハレに大学が生まれている。

16世紀はマルティン・ルターによる宗教改革のあった世紀でもある。スイスでは宗教改革者カルヴァンによりジュネーヴ大学が成立したが、ルターの宗教改革においてプロテスタントの牙城としての役割を果たしたのがヴィッテンベルク大学であったことから分かるように、この時代のドイツ語圏にあって宗教と大学は切り離せない関係にあった。北ドイツの大学は一般にプロテスタント色が強まったため、カトリックの学生は大学を去ったという。また1527年に開学したマールブルク大学は初のプロテスタント大学であり、君主の政治的宗教的意図に添う形で設立されたのであった。逆にバイエルンのヴェルツブルク大学は、15世紀初頭にいったん開学したもののまもなく廃校となったが、16世紀末に改めて反宗教改革的な意図からカトリック大学として再建された。ただし、ステファン・デイルゼーは、それ以前からドイツ語圏では大学は国家機関としての性格を強めており、宗教改革などはその傾向を強めたただけだ、と述べている。³⁾ ウィーン大学のようにカトリックとプロテスタントが混在する例もあった。ただしドイツ語圏ではヨーロッパの他地域より宗教と大学の結びつきが強く、既述のヴェルツブルク大学のように宗教運動そのものが大学に担われている場合が珍しくなかったのである。

しかし16～17世紀は神聖ローマ帝国の受難と解体の時代でもあり、帝国の荒廃は大学の運命にも少なからぬ影響を与えた。学生数の減少、風紀の乱れ、大学財政の破綻、教授への給与の劣悪化。それによって、ドイツでは知的生活が破綻に瀕した。近代医学の基礎は16世紀にイタリアで作られたが、ドイツがこれを取り入れたのは18世紀も半ばであったという。

1730年頃、神聖ローマ帝国には32の大学があり、プロテスタント系18、カトリック系14であった。⁴⁾ 1737年に創設されたゲッティンゲン大学では優れた学者を集めるため教授に大幅な自由と特権が認められ、またドイツ語圏初の付属図書館も併設された。フランス革命とナポレオン戦争は、一方ではドイツの大学に荒廃、場合によっては廃校の運命をもたらしたが、他方でケーニヒスベル

ク大学のカントのような優れた学者を生み出す契機ともなった。カントによって英仏語圏の学者もドイツ語圏の大学に注目するようになり、また18世紀末から19世紀初頭の短期間ではあったがイエナ大学もシラー、フィヒテ、ヘーゲル、シェリング、W. v. フンボルトなどの学者を輩出し大きな注目を集めた。そして19世紀初頭、ベルリン大学が創設され、新しい時代に対応した大学のひな型となるのである。

ちなみにシュトルムも、故郷に近いキール大学に学んだものの、一時期はベルリン大学に籍を置いていた。

3-1 『グリースフース年代記』の概要

さて、最初にシュトルム晩年の小説『グリースフース年代記 Zur Chronik von Gieshuus』（1884年発表）を取り上げたい。なぜこの作品を最初に取り上げるかという点、そこに大学卒業者とそうでない者の相違が明瞭に描かれており、なおかつ大学卒業者であっても人物ごとに作中で果たす役割に大きな差が見られるからである。また、作品の語りの構造そのものが大学卒業者と関わりを持っているからでもある。

シュトルムは晩年に本作品を初めとする年代記小説をいくつか書いている。いずれもシュトルムから見ても100ないし200年前の時代を舞台としているところから、これを現実逃避と見る向きもないではないが、実際は年代記小説にこそ作者の同時代的な問題意識が投影されていることはつとに指摘されている。しかし、シュトルムを囲む19世紀の現実が個人の方の限界を感じさせる中で、啓蒙的な努力とその成果は年代記小説の扱う過去の世界でこそくっきりと描き得たのだ、という指摘もある。⁵⁾

シュトルムの小説としては『白馬の騎手』に次ぐ長さを誇る『グリースフース年代記』は二部構成で、第一の書は17世紀、第二の書は18世紀の、いずれもシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方を舞台としている。枠小説であり、最初に登場して語り始める一人称の人物はシュトルムが生きた19世紀の人間であるが、彼は自分の蒐集した資料に基づいて過去の時代を再現しようとする。グリースフースは作者シュトルムのこしらえた架空の地名であり、「年代記」とい

うタイトルはこの地を支配するユンカー数代の消長を描くことがこの作品の目的であるところから来ている。

『グリースフース年代記』第一の書の年代記部分には、双子の兄弟が登場する。舞台となる地の支配者である老ユンカーの息子で、ユンカー・ヒンリヒとユンカー・デートレフという名である。双子でありながら性格は対照的で、兄ヒンリヒは学問より農耕作業や猟を好み短気で直情径行であるが、弟デートレフは室内での読書を好むという設定である。もっとも弟も日ごろは物静かではあるが、いったん怒りに駆られると目がうつろになり、感情の生起が読めなくなるという無気味さも備えている。この地の人々には兄が老ユンカーの跡目を継ぐものと見なされていた。

ちなみにユンカーは一般にはドイツの土地貴族と理解されているが、身分的には正式の貴族ではなく、正規の貴族と平民との中間に位置している。実際、『グリースフース年代記』の最初のあたりで19世紀に生きる語り手は、かつてグリースフースの領主たちが住んでいた屋敷の跡地を見ながら、次のように述懐する。⁶⁾

ほどなく貴族領となり後に国王領にもなった土地を別にすれば、私たちの近隣には貴族と言われる人は住んでいなかったからである。（Ⅲ，201）

すなわち、人々の記憶に残り話の種ともなっているユンカー一族は準貴族に過ぎないが、それでも正規の貴族がいない土地柄にあっては高貴な一族と見なされていたと言っているのである。

話を小説に戻す。やがて弟デートレフは少し離れた町にある修道院附属学校をへて、ライプツィヒ大学に進学し、法学と古典を勉強する。当時大学ではフランスやイタリアに倣って華美な服装が流行していたが、デートレフはそれにはまらぬよう注意していた。とはいえ、たまにグリースフースの地に帰省すると、都会暮らしの若殿の外見に注目する庶民たちが多かったとも書かれている。やがて彼は大学を出てゴットルフ城（これはシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方に実在した）の有力な官僚となり、なおかつ当地の貴族令嬢と婚約す

るに至る。

他方、地元のグリースフースに残った兄ヒンリヒは、近隣に住む庶民の美しい娘ベルベと恋仲になる。身分違いの恋を危ぶむ配下からの忠告も無視して、彼は娘を正式の妻にするつもりでいる。だがそれは父である老ユンカーの意向に背くことであった。ヒンリヒは一度キールに父の代理で出張し、そこで舞踏会に出てふさわしい相手を見つけるよう父に命じられたにもかかわらず、いわば手ぶらで帰ってきた。舞踏会では弟の許嫁と一緒に踊る機会もあったが、最新流行のフランス式の舞踏をよく踊れないヒンリヒを彼女は侮蔑の目で見たに過ぎなかった。

老ユンカーは、庶民の娘と結婚する意思を変えない長男を快く思わず、地区牧師に対して長男を破門するよう要請するが、牧師はそれを拒む。やむを得ず、老ユンカーは公証人への遺言で、この土地の後継者を長男ではなく次男にすると書き残す。長男であるヒンリヒはそれを知らないままに父の死を迎えるが、葬儀の席で弟デートレフから父の遺言状が地方裁判所に預けられたことを聞かされる。遺言状の内容はヒンリヒの予想に反するものであった。遺言状開封に弟は立ち会っていなかったが、その代理人が兄に宛てた弟の手紙を持参していた。

弟は次のように書いていた。自分は遺言状の内容をあらかじめ知っていたが、兄が父の期待にそむく結婚をしようとしているという事実がある以上、父を諫めることはできなかった。もし兄が下賤な生まれの妻と別れるのであれば、父から譲られた財産を交換する用意がある。また離婚の手立てについては助力を惜しまないつもりだ。

これを読んだヒンリヒは激高し、手紙を破り捨てて妻の待つ家に帰る。ちなみに新婚後のヒンリヒ夫妻は、ヒンリヒが伯母から遺贈された近くの小農場に住んでいた。

しかしことはそれでは収まらなかった。兄弟は二人とも自分が父の遺した土地と屋敷の正式な相続人だと主張したからである。一度、教会で儀式が行われたとき、ユンカー用の上等な席にヒンリヒ夫妻がすでに座を占めているところに、弟と許嫁がやってきて危うく争いになりそうになったことすらあった。

やがてヒンリヒの妻は身ごもる。しかし出産まで2ヵ月という時期、ヒンリヒの留守中に書簡が届く。それは、ヒンリヒと妻との婚姻は法的に無効だとする裁判所の決定を通知したものであった。言うまでもなくその背後には弟デートレフの起こした訴訟があった。これを読んだ妻はショックのあまり早産してしまい、生まれてきた女の子はかろうじて助かったが、自らは産褥で命を落とす。そして弟の訴訟で妻を失ったヒンリヒは激怒し、弟を殺して姿をくらます。後には早産で生まれた女の子だけが残される。以上が第一の書の筋書きである。

第二の書は、その女の子ヘンリエッテがグリースフースからは少し離れた町で成長し、長じてスウェーデン人の大佐と結婚するが、男の子ロルフを生んで数年後に死んでしまうところから始まる。残された夫である大佐は、先祖伝来の土地と屋敷の相続権を持つ息子ロルフ（第一部のヒンリヒからすれば孫）を連れてグリースフースの屋敷に移住する。第二の書はそのロルフの成長物語がメインとなっている。途中で猟区長として不思議な老人が大佐によって雇われるのだが、実はこの老人こそ失踪していたヒンリヒであった。しかしヒンリヒは自分の正体を明かさず、孫の成長を近くから見守っている。そして近隣地域から恐ろしい狼を根絶する仕事が終わると、正体を明かさないうまま去って行く（ただし孫のロルフだけは猟区長の正体を途中で知ることになる）。長じたロルフは軍人となるが、やがて戦争で命を落とし、彼を救おうとした祖父ヒンリヒもほぼ同時期に死去し、一族の血は絶える。

3-2 第一の問題——双生児兄弟の学歴の差異について

さて、第一部では双生児兄弟の争いが描かれているが、ここで学歴の果たす役割について検討しよう。

兄弟は幼少期は家庭教師により教育を受けたが、兄ヒンリヒは学業に興味が薄く、野外での力仕事や狩猟を好み、早い時期から父の跡目を継ぐものと思われていた。対して弟デートレフは家庭教師のお気に入りですべて読書を好み、長じては修道院の付属学校からライプツィヒ大学に進学する。そして主として古典と法学を勉強する。

ここで、作品に即して大学史の問題に少し細かく言及しておこう。第一部は17世紀半ばの出来事だと語り手によって言われている。(Ⅲ, 203) 当時はこの作品の舞台となっている、そして作者シュトルムの故郷でもあるシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方には大学が存在しなかった。現在でもこの地方の総合大学は唯一キール大学のみなのであるが、後で改めて触れるけれども、この作品の第二の書の初めのあたりでキールに大学が設立された事実に言及がなされている。(Ⅲ, 244) それは1665年のことであり、17世紀半ばは過ぎであって、デートレフが修道院の付属学校を出た当時はまだできていなかったと考えられる。

より詳しく述べるなら、この小説の第一部では「ポーランド人戦争」が起こっているが(Ⅲ, 210)、この戦争は1658年から60年にかけてスウェーデンとデンマークの間に行われており、その頃デートレフはすでに大学生であった。また、以下のような箇所もあり、ここで言う新年とはフリードリヒ公爵の没年の翌年であるから1660年のことと確定できる。そしてこのときデートレフはすでに学生生活を終え、高級官僚として貴族令嬢と婚約するにいたっていた。

そして新しい年が来た。戦争による不穏な状況は続いていた。若き公爵クリスティアン・アルブレヒトはアイダー河畔の堅固な町にいて、デンマーク軍から包囲されていた。ただ彼の父、われらのフリードリヒ公爵は、すでに秋になる前、みづから長らく望んでいた永遠の安らかな眠りについていた。(Ⅲ, 225)

こうして、デートレフはまだシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方に大学が創設されていなかった頃に、故郷を離れてライプツィヒ大学に進学する。ライプツィヒ大学は1409年に創設されており、その歴史はドイツ語圏の大学の中では古いほうである。ドイツ語圏の大学として最も古いのは14世紀後半に創設されたハイデルベルク大学とウィーン大学であるが、ライプツィヒ大学もそれに次ぐ伝統を誇る。⁷⁾ 16世紀になるとドイツ語圏の大学の数も増えてくるが、それでもドイツ語圏の北端であるシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方からするとライプツィヒ大学は距離的に最も近い大学の一つであった。ちなみに、北ド

イツ最大の都会ハンブルクに大学ができたのは20世紀初頭になってからである。

次男としてのデートレフの生き方は、兄ヒンリヒが父の跡目を継いで領地を支配することを前提にしている。領地の後継者はひとりで足りるから、双子の弟である自分は別の場所で仕事をするしかない。幸い幼いときから読書が好きで学問への志向を持っていたデートレフは、言うならば学歴を活かして高級官僚になる道を選んだのである。貴族令嬢との婚約もそうした人生行路の一部ではあるが、これは彼がユンカーという身分であったことから可能になったものであろう。

他方、父の領地を継ぐつもりで、周囲からもそのように目されていた長男のヒンリヒには学問への志向はまったくなかった。狩猟や力仕事が好きな彼は、領民からすればデートレフより親しみやすい存在だったと言える。

そのまま行けば、双生児兄弟の人生行路は双方が納得する役割分担のもとに波乱なく進むはずであった。それがそういかなかったのは、既述のようにヒンリヒが父の意向に反して身分の低い娘と恋に落ち、結婚を申し出たからである。ここで注目すべきは、ユンカーという身分を持ち、父の領地を相続することに何の疑問も持たないヒンリヒが、しかし結婚に際しては身分不相応の相手を選び、しかも周囲の反対にも屈しなかったというところである。そのため父は次男デートレフに領地を相続させるという遺言を残した。そして弟デートレフはあらかじめ父の意向を知っていた。それは単に兄ヒンリヒが結婚問題で父と折り合いが悪くなったという事情だけから来るのではなからう。大学で法学を学んだデートレフには父も遺言について法的な相談を持ちかけたと想像されるのである。また、兄に離婚を勧める手紙の中でお手伝いできようと弟が書いているのも、大学で法学を学んだ者ならではの意識が表れている。つまり、大学卒業者としての行動をデートレフはとっているのだ。その後、兄の婚姻が無効だという訴訟を起こすのも同じことである。

少し細かく見るならば、ヒンリヒの妻ベルベの亡き父はかつて農奴身分から自由人になったが、それを文書で領主に確認してもらった手続きを怠っており、ために彼もその娘も法的には農奴のままであって、領主たるユンカー・ヒンリ

ヒが自分の農奴である女性と婚姻関係を持つことはできない、と裁判所は認定したのであった。

以上、まとめて見るなら、双生児兄弟の一方が大学に学ぶという設定が筋書きの展開に大きく影響していることは明らかだろう。とりわけ、裁判に訴えて兄とその妻との婚姻関係を否認してしまうところは、いわば法の穴をつくやり方であって、いかにも大学で法学を学んだ者が思いつきそうな手段である。逆に言えば、兄は大学で学ばなかったが故にそうした可能性に思い至らなかったのである。

以上の筋書きからも分かるように、この第一の書では、いささか短気なところはあつたものの身分違いの恋を貫く長男ヒンリヒが善玉、大学で学ぶという当時としては稀な特権を享受しながら、そこで得た学識によって身分違いの恋を引き裂き、結果として兄の妻を死に至らしめる次男デートレフは悪玉と見ることが出来る。

第一の書では、こうして大学卒業者に負の刻印が押されて終わっている。

3-3 第二の問題——この小説の語り手について

3-3-1

さて、以上のように第一の書の展開に主要人物の学歴が絡んでいることを確認した上で、次の問題を提起しよう。この小説にあって読者に奇異の念を抱かせる部分、つまり語り手の設定である。

この作品では最初に作者シュトルムと同時代の19世紀に生きているとおぼしき語り手が登場し、自分が少年時代からグリースフースに興味を抱いていたこと、そして機会あるごとにグリースフースに関する資料を蒐集してきたので、父親から「グリースフースの年代記者」と戯れに呼ばれてきたことを説明する。その上で語り手はグリースフースの年代記を物語っていく。第一の書では17世紀の出来事が、第二の書では18世紀の出来事が語られる。普通に考えれば、枠小説として、19世紀の語り手による語りは最後まで続くと思われられるのである。

ところが、第二の書に入って少し進んだところで、語り手は突如自分の役割

を放棄し、たまたま18世紀にグリースフースの領主屋敷で家庭教師として勤務していた聖職者の記録が手に入ったと述べ、それ以降はその記録を忠実に転記するだけで済ませてしまう。語り手はこれ以降、二度と登場しない。

この聖職者こそ、家庭教師として第二の書の主人公であるユンカー・ロルフを教育する人物マギスター・カスパル・ボーケンフェルトである。彼の手記は、家庭教師として屋敷に雇われ、ロルフの成長を見守り、最後にロルフが軍人として命を落とすところまでを記録している。

なぜ第二の書の途中で作者シュトルムはわざわざ新しい語り手を導入したのであろうか。たしかに、第二の書はロルフの成長物語であるから、その語り手には家庭教師として日頃から親しく接していた人物が最も適しているとは言えるだろう。年代記という形式にはやや不便なところがあって、過去の出来事や人物同士の関係を後代の人間がいかにか調べようとも不明な点は残るのであり、そうした記録の穴を克服するためには、或いは穴がない記録を自然と見せるには、教え子の成長を絶えず見守っていた家庭教師が手記を残していたという設定にすることが、最も巧みな方法ではあるだろう。

しかし、シュトルムの年代記小説にあっては、年代記という形式がいつもきちり守られているわけではない。ふつうに考えて、二百年も昔に生きた人間の微妙な心理や異性関係、プライベートな事柄を後代の人間がこんなに詳細に知っているわけがない、と言いたくなるような叙述も多いのである。言い換えれば、年代記という形式は作家シュトルムにあってはあくまで言い訳なのであって、実際にははるか昔の物語を展開するための効果的な衣装として年代記という形式が採用されているのだと見ていい。シュトルムが彼の同時代、つまり19世紀を舞台とする小説を書く場合と、年代記小説で17世紀を舞台とする作品を書く場合とで、記述のしかたが根本的に異なっているわけではないのだ。

『グリースフース年代記』第一の書にしても、ヒンリヒとベルベの身分違いの恋については、年代記小説という枠をはみ出すような、つまり甘やかな恋愛小説的な描写がしばしばなされている。とすれば、第二の書でロルフの成長を描くにしても、わざわざ家庭教師の手記という形式をとる必然性はなかったはず

である。にもかかわらず、しかも第二の書の冒頭からではなく途中から、シュトルムはロルフの家庭教師という新しい語り手を導入している。ここにはそれなりの理由があると見なければならぬ。つまり、家庭教師は単に語り手として出てくるのではなく、作中の登場人物として一定の役割を果たしているのではないかということである。ではその役割とはどのようなものなのか。

3-3-2

筋書きの面で見ると、マギスター・カスパル・ボーケンフェルトの役割はきわめて小さい。彼はあくまで領主一家に仕える家庭教師に過ぎないし、ロルフに様々な知識を与えはするけれども、それが最終的に教え子の生き方に多大な影響を及ぼすわけではない。ロルフは結局はスウェーデン軍大佐だった父に倣うように軍人になり、ために戦争で命を落とす。

しかし、この家庭教師を本論文のテーマである大学や学歴という側面から見るなら、作中で彼の持つ一定の意義が見えてくるのではないか。

マギスター・カスパル・ボーケンフェルト (Magister Caspar Bokenfeld) は、そのマギスター (修士) という称号からも分かるように大学卒業生である。彼は西暦1702年の初めに家庭教師としてグリースフースの領主屋敷に赴くのであるが、屋敷のとりあえずの当主である大佐は (とりあえずというのは、前述のように、この屋敷は彼の亡き妻が相続したものであって、彼は息子が成人に達するまでの暫定的な当主だからである) 息子のユンカー・ロルフにボーケンフェルトを紹介する。当時ロルフは11歳であった。この場面を引用しよう。語り手の「私」はボーケンフェルトである。

少年は鋭い碧眼で私を見つめた。まるで全力で私の正体を探り出そうとでもいうかのようだった。それから素敵な言葉を発した。「お前も乗馬をやるのか、マギスター？」

すると大佐殿は笑って、息子の肩を叩いた。「おやおや、困った奴だな。この方は乗馬は教えないんだよ。だが、マギスターには『あなた』と言いなさい。この方はきっと正しい道を教えて下さるだろう。」

こうして、私は緊張がほどけた。それまで、貴族と交際した経験がなかったからである。（Ⅲ，250）

ここで、少年は最初、屋敷の召使いに対して日頃使っているのものであろう「お前（Er）」で語りかけている。Erはこの時代（18世紀）に目下の人間に対して使われた二人称代名詞である。それを聞いた父たる大佐は、「マギスターには『あなた（Sie）』と言いなさい」と指示を与えている。Sieは自分と対等の相手に対して敬意をもって使う二人称代名詞である。それでボーケンフェルトは緊張がとけるのだが、そこで「これまで、貴族と交際した経験がなかった」と述べている。

以上から、ボーケンフェルトは平民であること、しかし大学卒業生としてユンカーたる少年の家庭教師になったのだから、普通の使用人に対するのとは違ってそれなりに敬意を表さなくてはならないと考えられていたことが分かる。

そして、大学卒業生としてのボーケンフェルトの持つ一種のプライドのようなものは、作中時々顔をのぞかせる。屋敷には親戚の中年男が同居していて、ボーケンフェルトが来るまではロルフ少年の家庭教師の役割も果たしていたのだが、この中年男についてボーケンフェルトは「この男は変わり者で、すべてを理解していると称しながら学識をまったく欠いていた」（Ⅲ，251）と批判的に述べている。

また、彼は屋敷の門のところにある建物の二階を自室として提供されるのだが、ここで「私は蔵書を持ってきていた。おそらく、ホメロスとウェルギリウス、アルノルドゥスとトマジウスがここの壁を飾ったのは初めてであったろう」（Ⅲ，251）とも述べている。自分の学識に対する誇りが見える記述だ。ここで、ホメロスとウェルギリウスはともかく、アルノルドゥスとトマジウスについては多少の解説が必要だろう。

ゴットフリート・アルノルト（Gottfried Arnold, 1666-1714：アルノルドゥスはアルノルトのラテン語形）とはこの頃活躍した急進的な敬虔主義の神学者である。ヴィッテンベルク大学で神学を学んだ。ヴィッテンベルク大学とは、言

うまでもなくその教授であるマルティン・ルターが1517年に「95カ条の論題」を学内の聖堂の扉に貼りつけたことにより宗教改革の発端となり、なおかつその後もプロテスタント神学の牙城となった学府である。アルノルトも当初はルター派神学の徒であったが、のちに神秘的な敬虔主義に傾倒して、これを放棄している。ギーセン大学で教鞭をとったこともあったが、すぐに退職し、やがて主著『教会と異端者についての非党派的な歴史 Unparteyische Kirchen- und Ketzer-Historie』(1699年)を書く。ここで彼は、大規模な教会組織は真のキリスト教の教えを裏切るものであり、教会により異端者とされた人間こそキリストの真の教えを知る者だ、と述べている。

クリスティアン・トマジウス(1655-1728)は啓蒙主義の哲学者である。魔女裁判や拷問の廃止を訴えた人物としても知られている。経歴を簡単にたどると、ライプツィヒに生まれ、当地の大学で哲学を学び、まず学士号(Baccalaureus)、ついで修士号(Magister)を取得する。その後法学に興味を抱き、フランクフルト大学で法学を学び博士号を取得するのである。学位取得後、故郷のライプツィヒに戻り、弁護士業を営むかたわら大学でも教鞭をとる。しかしラテン語でなくドイツ語で講義を行なったことなどから大学や宮廷との対立が顕在化し、やがてハレに転居、ハレ大学の創設に関わることになる。多数の著作を出してもいる。⁸⁾

つまりボーケンフェルトは一方で古代ギリシアや古代ローマの名だたる詩人を学び古典的な素養を身につけている一方で、敬虔主義の神学者、そして新時代の啓蒙主義の文筆家の書物をも持参してきているのである。そして彼は上で引いた蔵書に関する記述に続いて、次のように述べている。

[彼が与えられた部屋の]階下に見える門からは酪農作業用の地下室の窓が一つのぞいていた。聞いた話では、人が夜分そばを通るとしばしばクリームをすくって移し換える音のはっきりと聞こえる、実際にはそういう仕事はしていないのに、というのであった。しかしこれは作り話である。私はその窓と向かい合った階段を部屋に上がっていくときには音が聞こえたためしはなかったからだ。(Ⅲ, 251)

田舎の迷信を冷静に否定してみせるボーケンフェルトの筆致は、啓蒙主義の徒と言われるにふさわしい。

しかし同時に彼は信仰心にも厚く、神に祈るような言い回しを作中しばしば用いているし、領主館に同居しているマッテンという盲目の老女が靈感を持っていることには否定的な言辭は吐いていない。

そもそも、ボーケンフェルトは大学でマギスターの称号を得てきたわけだが、では卒業後の職業として何を想定していたのだろうか。彼が異端の書物に言及している箇所がある。（Ⅲ、258f.）それは17世紀に実在して禁書指定を受けた書物であるが、彼の従兄にあたる牧師がこの禁じられた本を隠し持っていたため、それを借り受けて読むにいたるのである。しかし、ボーケンフェルトはこの書物については「厚顔無恥」「汚物のような」という否定的な言辭を吐いているから、普通の信仰心をはみ出るような意識は持っていないようだ。また、従兄が牧師であるということは、一般的に近い親族は家庭の知的レベルや経済状況、そして職業選択において類似している場合が多いことを考えるなら、ボーケンフェルトも同様の職業に就く可能性が少なからずあるという推測ができよう。

またボーケンフェルトはユンカー・ロルフの家庭教師を勤めていた時期に、屋敷に同居している中年男（上述のように、この男には学識が欠けていると彼は批判していた）から「尊師殿（Ehrwürden）」と呼ばけられている。（Ⅲ、260）これはカトリックで修道士などに呼びかける場合に使われる称号であり、舞台は18世紀のシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方であるからプロテスタントの地域であるけれども、ボーケンフェルトは現在は学齢期にあるユンカーの家庭教師を勤めているが将来は牧師になるのだろうと見なされていたことを示している。

実際その後、村の牧師が町の教会の第二牧師に栄転する話が出た時には、ボーケンフェルトは後釜として村の教会の牧師職に就きたいと雇用主である大佐に申し出ている。（Ⅲ、265）この話は立ち消えになるのだが、それから数年を経て1709年かその前年に彼が牧師職に就いていることが作中の記述から分かる。（Ⅲ、276）家庭教師としてグリースフースに赴任したのが1702年の初頭で

あるから、6～7年程度で家庭教師は辞め、牧師の地位に収まったことになる。この時点で教え子だったユンカー・ロルフは屋敷を離れ、父の故郷であるスウェーデンで士官見習いとなっていた。

さて、いささか長々とボーケンフェルトの経歴について語ってきた。彼のこうした経歴は、おそらくは18世紀初頭の北ドイツにあって大学卒業者がたどる典型的なコースであっただろう。またこうした経歴から、おそらく彼は神学部に学んだものと推測できる。マギスターの学位を得て神学部を卒業した人間が、若い頃は家庭教師として勤めても、最終的には牧師の地位をめざすのはごく自然なことだからである。⁹⁾

ただし、先に見たようにアルノルトとトマジウスの書物を身近においている彼は、プロテスタント神学にはそれなりに通じていても、教条的な信徒ではないと言えるだろう。アルノルトは最終的にはプロテスタント教会にそむき、より自由な形での信仰を説いた人だからである。その意味でも、ボーケンフェルトは学識や信仰心や判断力においてきわめてバランスのよい、総合的な教養を身につけた人物と見てよいだろう。

3-3-3

一見すると第二の書の語り手に過ぎず決して主要な登場人物ではないはずのボーケンフェルトが、よく読むなら以上のような経歴や人となりを読み取れるようにこの小説は作られている——これはこの小説を読み解くにあたってきわめて重要な点である。つまり、この語り手は単なる語り手ではなく、作中であってそれなりの重みを持つ人物として造型されていると見てよい。

ではこの人物は作品内で語り手として以外にどのような意味を持っているのだろうか。

ここで注目したいのは、第二の書の最初のあたりで、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方における大学の創設に言及がなされているという事実である。上述のように第二の書は最初は第一の書と同じく19世紀に生きている人物がそのまま語り手を務めるが、途中から記述は新発見の手記を提示するという形になり、語り手は事実上ボーケンフェルトに交代する。ここで問題にしている大

学創設に言及した箇所とは、まだボーケンフェルトが登場せず、第一の書と同じ語り手が語っている部分である。

グリースフースでもこの地方のどこでも荒廃が目についた。われらがクリスティアン・アルブレヒト公爵は、父から受け継いだフェルディナント皇帝の勅許状をもってキールに大学を創設した後、十四年の長きにわたり居城から追放された。公爵の忠実な官吏たちをデンマーク王は追放もしくは捕縛させ、この地方をその絶えざる軍備増強によって疲弊させた。（Ⅲ、244）

日本人には馴染みが薄いですが、ここで触れられているのは1675年にシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方の支配者クリスティアン・アルブレヒト公爵がデンマーク王クリスティアン五世によってレンズブルク（シュレスヴィヒとホルシュタインの接点に位置する町）に幽閉され、シュレスヴィヒに対するデンマークの封建的支配権を認めさせられたという事件である。公爵は翌1676年に脱出してハンブルクに亡命し、1689年によく元の主権を回復した。上の文で「十四年の長きにわたり居城から追放された」とはこの事件を指している。

キールの大学は、クリスティアン・アルブレヒト公爵の父であるフリードリヒ三世公爵が1652年に皇帝フェルディナント三世から勅許状をもらうことで設立準備が始まったが、実際の設立はフリードリヒ三世の死後6年をへた1665年、クリスティアン・アルブレヒト公爵によってなされたのである。

問題なのは、なぜここでわざわざキール大学の創設について触れなくてはならないのかということである。確かに大学創設はクリスティアン・アルブレヒト公爵の大きな業績には違いないが、公爵とデンマーク王との権力争いという歴史的事実とは直接的な関係はない。なのに敢えて語り手はシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方を統治する公爵と、その統治権を奪おうとするデンマーク王との争いに触れるに際して大学創設にも言及するのである。その意図はどこにあるのか。

上の引用文で注目すべきは「われらがクリスティアン・アルブレヒト公爵

unser Herzog Christian Albrecht」 という表現だろう。語り手は中立的な立場をとってはいない。明らかにシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方を統治する公爵の側に立っている。

改めて振り返ってみよう。第一の書、および第二の書でボーケンフェルトの文書が出てくるまでの語り手、これを第一の語り手と呼ぶならば、彼はどのような人間であったか。第一の書の冒頭から明らかなのは、彼が19世紀のシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方に育った人間であり、ラテン語学校に通っていたという事実である。(Ⅲ, 198ff.) 第二の書では、第二の語り手であるボーケンフェルトが出てくる直前、第一の語り手は大学入学後の最初の秋休みに故郷にあってグリースフースの地を訪れ、そこで急な嵐に会って雨宿りをさせてもらった教会の役僧がたまたまボーケンフェルトの子孫であったためにその手記を見せてもらうことができた、という設定になっている。(Ⅲ, 249f.)

すなわち、第一の語り手は19世紀のシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方に生まれ育ち、当時としては少数者にのみ許さる特権とも言うべき大学進学を果たしながらも、同時に郷土愛を捨てることがなかった人間だということになる。では彼はどこの大学に行ったのか。作中には書かれていないが、それがキール大学であったと考えてみても不自然ではないだろう。故郷シュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方唯一の総合大学がキール大学なのだし、そもそも作者シュトルムも、一時期はベルリン大学に転学しているが、基本的には故郷のキール大学で学生時代を過ごしたのだから。

以上のように考えてみるなら、第二の書の最初のあたりで第一の語り手がわざわざキール大学の創設に触れているのは、自分の学んだ学府をそれとなく暗示しておくという意味合いをこめてのことではないだろうか。

さて、次に第二の語り手であるボーケンフェルトの進学先を類推してみよう。彼がどの大学で学んだのかについては、第一の語り手と同じく作中では語られていない。しかし、第二の語り手もやはりキール大学で学んだと考えるのが妥当ではないか。なぜなら、彼は一方では上述のように自分の学識を誇りながらも、他の都市での生活体験を語ることはないからである。老いた猟区長(実は第一の書の最後で失踪したユンカー・ヒンリヒ)がユンカー・ロルフ(つ

まり孫)にプロイセンを含む外国での放浪生活体験を語るシーンがあるが(Ⅲ, 273), その際に語り手のボーケンフェルトが話に加わったとは書かれていない。つまり, ここから見ても彼はシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方の外に出たことがないと推測できるのである。

ボーケンフェルトがこの地方の人間であり郷土意識を持っていることは, 彼の手記の冒頭で次のように言われていることから明らかである。

紀元一七〇二年は, われらが公爵フリデリクス四世 (unser Herzog Fridericus IV.), 苛酷な運命に見舞われたクリスティアン・アルブレヒトの息子であるその人が, ポーランドのクリソフにおいて義父であるスウェーデンのカルロス十二世のために若い命を捧げた年であるが, 同年一月の公現日直後の日曜に, 私は初めてグリースフースに赴いた。(Ⅲ, 250)

ここでも, シュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方の統治者であるフリードリヒ四世公爵を, 大学卒業者らしくラテン語形でフリデリクスと記しながらも, 同時にそこに「われらが」という所有詞を添えるところに, 第一の語り手同様の郷土意識が見て取れる。なお, シュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方の統治者やその妃にボーケンフェルトが「われらが」という所有詞を付ける例はこれ以降にもいくつか見られる。また, グリースフースに赴任したのが1702年1月なのだから, 彼が大学に学んだのはその直前の時期, すなわち1690年代, 或いは1690年代から1700年代初頭にかけてだったのではないかという推測も可能になるのである。

3-3-4

さて, では第二の語り手であるボーケンフェルトが(推測ではあるが)地元の大学を出た郷土意識を持つ人物であること, そして最初は地元の準貴族の家庭教師, のちには聖職者になるということ以外にこの小説から分かることがあるだろうか。それは, 彼の愛と家族である。

第二の書にはアーベルという女の子が登場する。第一の書のヒロインがベル

べだったとするなら、第二の書のヒロインはアーベルである。しかしベルベが身分違いの恋によりユンカー・ヒンリヒと一応は結ばれるのに対し、アーベルはやはりユンカー・ロルフに恋するものの、その恋は実らない。¹⁰⁾ ユンカー・ロルフはアーベルにも他の女性にも興味を示さず、結局は戦いにより若い命を散らす。そしてその後アーベルと結婚するのは他ならぬ語り手のボーケンフェルトなのである。彼はグリースフースの領主館でロルフの家庭教師を勤めながら、徐々に自分がアーベルに異性としての愛情を抱いていることを自覚し、彼女を妻にしたいと願うようになる。ロルフの死後その願いは叶うが、アーベルはそれでもロルフのことが忘れられず、ボーケンフェルト夫妻は夭折したロルフのために記念の薔薇を植えて育てることにする。第二の書の最後では、ボーケンフェルトの手記が自分の息子と娘のために残されたものであることが記されており、彼とアーベルが一男一女を設けたことが分かるようになっている。(Ⅲ, 292f.)

第二の書で男女の愛が最も直截的に表現されているのは、ロルフの葬儀の場面だ。戦死したロルフの棺が安置された部屋で、アーベルはじっとうずくまっているところをボーケンフェルトに発見される。ロルフをそんなに好きだったのかと問うボーケンフェルトにアーベルはうなずくのだが、アーベルを妻にと考えていたボーケンフェルトは嫉妬に駆られ、牧師としての立場を強調して「神のお慈悲が彼にすべてを与えて下さる」と冷淡な口調で言う。すると――

すると彼女のダークの目がほとんど瀟神的な表情で私の目を見据えた。あたかもわれらが神ではなく一人の女だけが、ロルフが失ったものを取り戻してやれるのだと教えを垂れるかのようであった。(Ⅲ, 289)

ここでは牧師としての仮面をかぶったボーケンフェルトは、夭折した若者への愛をあからさまに表現する女を前にしてたじろいでいる。¹¹⁾ それはまた、世間的な道德規範を超える男女の愛にそれなりの理解を示す近代人的な態度だとも言える。

ボーケンフェルトは牧師という職を選んだことからして大学では主として神

学を学んだものと推測されるが、しかし先に見たように迷信には取り合わない理性的な判断力をも備えていた。また異端とされるような極端な信仰心にも警戒的であった。

つまり、第二の語り手であるポーケンフェルトの人となりや人生は、この作品を読む中で自然に浮かび上がってくるようになっているのであり、また彼の姿はほぼ理性的な近代人の姿だと言っていいのである。牧師として信仰心を大切にしながらも、迷信や邪教には目もくれない。妻をめとり子をなし、家庭人としての生活も大事にする。そして女の愛が時として教条主義的な宗教の定めを越えることも認めている。

ここで、結婚がこの作品の中でどういう意味を持っているか、改めて考えてみよう。第一の書では繰り返すまでもなく身分違いの恋と結婚が作品の中心をなしており、それが悲劇につながっていく。しかし、そこでユンカー・ヒンリヒとベルベの愛に周囲はどういう態度をとっていたであろうか。

ヒンリヒの父である老ユンカーと双生児の弟デートレフは身分違いの愛に反対した。ヒンリヒの年長の狩猟仲間である地区猟師オーヴェ・ハイケンスも同じであった。では味方はいなかったのだろうか。老ユンカーは長男ヒンリヒが身分違いの恋を父親である自分の意向に背いてでも貫こうとしているのを知って、ある日老いた牧師を館に呼び寄せ、長男を破門して欲しいと要請する。しかし牧師は、教会寄進者にして権力者である老ユンカーの機嫌を損なわないよう配慮しながらも、破門を行うことには反対する。そして、「われらがマルティヌス様が騎士の娘を妻に迎えたのは、やはり罪なのでしょうか？」と問いかける。(Ⅲ, 231)

マルティヌスとはプロテスタントの創始者マルティン・ルターのことである。周知のようにルターは聖職者の結婚を認めないカトリックを批判して自らカタリーナ・フォン・ボーラと結婚し、子供も設けた。カタリーナは修道女だが、姓の前にフォンが付くことから分かるように貴族の娘であった。一方ルターは大学を出た秀才とはいえ平民の息子に過ぎない。つまり、男女は逆であるものの、ルターも身分違いの結婚を実践したということになる。この場面での牧師はそれを指摘し、身分違いの愛を理由にヒンリヒを破門することだけではでき

ないと老ユンカーの意向を拒否するのである。

そしてこの牧師は、のちに老ユンカーが死去して葬儀が行われた直後に、ヒンリヒがベルベを伴って牧師館を訪れ二人の婚約を認めて欲しいと頼んだとき、手を震わせながらも二人の頭に手をおいて祝福を与える。(Ⅲ, 234) 亡くなった権力者の意に背くことだと知りながらも、老いた牧師はマルティン・ルターがみずから実践した結婚の意義を念頭において二人の結婚を認めたと見ていだろう。

すなわち、ボーケンフェルトが第二の書の最後で自らの結婚、そしてそこから生まれた子供たちに言及しているのは、プロテスタント神学の創始者ルターが、聖職者といえども普通の結婚生活を送ることに意義を見出したという先例の良き模倣なのである。いや、聖職者としてというような殊更な言い方はしなくてもよい。普通の市民的な生活を送ること、それを実践したのだ。この小説全体の表舞台ではユンカー一族の四代にわたる悲劇的な物語が繰り返され、最終的には一族滅亡で幕切れとなるのと比較して、目立たなくはあっても一種健全な職業人の人生が語り手ボーケンフェルトの姿によって提示されているのである。そしてその家庭生活は、大学で学び学識を誇りながらも、きわめてバランスのよい信仰心と判断能力を持ち、時としては信仰を越える人間の愛にも理解を示すボーケンフェルトの人となり、或いは総合的な教養によって可能になったと言える。第一の書で大学卒業生ユンカー・デートレフが学識を悪用して兄の妻を死に追いやったのと比べるなら、大学卒業生のあるべき姿がボーケンフェルトという語り手によって描かれているのではないだろうか。

3-4 小結

さて、『グリースフース年代記』の大学・大学卒業生についてまとめてみると、次のようになる。

第一の書では、ユンカー・デートレフが大学卒業生として登場する。彼は1650年代にライプツィヒ大学で古典と法学を学ぶのだが、この頃はまだシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方唯一の総合大学となるキール大学は創設されていない。第一の書での彼の位置は言うならば悪玉であり、法律の知識を悪

用して双子の兄の妻を死に追いやるのである。彼はまた、大学卒業後は今で言う高級官僚の仕事に就き、貴族の娘と婚約する。

1665年、ようやくキール大学が創設される。第一の書、および第二の書の途中までを担当する第一の語り手は、19世紀に生きる人間だが、大学に学んでいる。作中明記はされていないもののキール大学に学んだと推測できる。少なくとも彼ははっきりとした郷土意識を持ち、語りの途中でキール大学の創設に言及している。

第二の書の途中から語り手として登場するマギスター・カスパル・ボーケンフェルトは、これもまた明記はされていないが、やはりキール大学に学んだと推測できる。身分は平民であるが、従兄も牧師になっているところから見て、学問への意欲の高い家系の出と思われる。自分の学識にプライドを持っており、家庭教師ののち牧師になるところからして大学では神学を学んだものと考えられる。むしろ信仰心は厚いが、他方で迷信や邪教に惑わされない健全な判断力を持つ。愛する女性と結ばれて家庭を作り一男一女を設ける。

以上のようにまとめてみると、第二の書の途中から登場する語り手ボーケンフェルトの持つ意義が見えてくるのではあるまいか。彼は大学卒業生のあるべき姿を示しているのだ。なぜなら、物語前半で唯一の大学卒業者であったユンカー・デートレフは悪玉であり、学識を悪用して兄の妻を死に追いやり、その怨みから兄に殺されるという悲惨な運命をたどったからである。大学進学者がきわめて少なかった当時、大学卒業者の持つ社会的使命、言うならばノブレス・オブリージュははっきりと存在したはずである。しかしデートレフはそれを果たさず、大学で得た知識を人殺しに使ったのであった。

もちろんボーケンフェルトは語り手であり、物語の前面に出てくる人物ではない。本作品の後半の中心人物はあくまでユンカー・ロルフ、そしてその祖父でありながら正体を隠して狩猟長として領主館に雇われるユンカー・ヒンリヒである。けれどもこの二人のドラマティックな生涯の影に隠れるようにしながら、ボーケンフェルトの波瀾万丈ならざる生涯も第二の書には明確に刻み込まれている。

作者のシュトルムには、そうするだけの理由があったのだと思われる。しか

しそれはこの『グリースフース年代記』だけを見ては分からないことである。次に、『グリースフース年代記』に先立つシュトルムの年代記小説を見ていく必要がある。

注

- 1) フリッツ・K. リンガー『読書人の没落——世紀末から第三帝国までのドイツ知識人——』, 26ページ。なお、ドイツの大学進学率は1960年でも8パーセントであったが、その後急上昇し、2010年現在で46パーセントに達している。以上は『ドイツの実情』, およびネット情報による。
- 2) クリストフ・シャルル／ジャック・ヴェルジェ『大学の歴史』, 28ページ。
- 3) ステファン・ディルゼー『大学史』上巻, 460ページ以下。
- 4) 同上, 下巻, 136ページ以下。
- 5) 前者の主張としては, Brian Coghlan und Karl Ernst Laage (hg.): Theodor Storm und das 19. Jahrhundert. S.115f. 後者の主張は, David A. Jackson: Theodor Storm, Dichter und demokratischer Humanist. S.261
- 6) シュトルムの作品からの引用はすべて以下のシュトルム全集により, 本文中の()内にローマ数字で巻数を, アラビア数字でページ数を示す。
Theodor Storm: Sämtliche Werke in vier Bänden. hg. von Karl Ernst Laage und Dieter Lohmeier. Deutscher Klassiker Verlag. 1987-1988
- 7) 中部ヨーロッパで初めて大学を持った都市はプラハで, 14世紀半ばのことである。それ以前は中部ヨーロッパの人間は大学と名が付く機関で学ぼうとするならパリかボローニャに行くしかなかった。しかし, プラハ大学ではボヘミア人以上にゲルマン人が占める割合が高く, それが内部紛争のもとともなったため, やがてゲルマン人はプラハ大学を退去し, ライプツィヒに大学が創設された。H. ラシュドール『大学の起源 中巻』202ページ以下。
- 8) 以上, アルノルトとトマジウスについての解説は, 底本の注釈, およびWikipedia (日本語版, ドイツ語版, 英語版) によったものである。
- 9) シュトルムは1879年に書いた『エーケンホーフ』の中でも, 最初は領主屋敷で若い牧師候補生が家庭教師を勤め, やがて牧師になるという設定を用いている(舞台はやはり17世紀のシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方)。ただしこの場合

牧師はあくまで副次的な人物であり、作品の語り手ではない。この作品と大学との関わりについても、いずれ触れる予定である。

- 10) 当初の構想ではロルフとアーベルが惹かれ合う筋書きも考えられたが、作者シュトルムは第一の書と同じパターンになることを避け、第二の書ではアーベルの片思いという筋書きに変更した。Ⅲ, 851を参照。
- 11) この箇所にはフォイアーバッハのキリスト教批判を読み込む学者もいる。

Brian Coghlan und Karl Ernst Laage(hg.): Theodor Storm und das 19. Jahrhundert. S.91

参考文献

- クリストフ・シャルル, ジャック・ヴェルジェ (岡山茂, 谷口清彦訳) 『大学の歴史』白水社文庫クセジュ, 2009年
- チャールズ・ホーマー・ハスキングズ (青木靖三, 三浦常司訳) 『大学の起源』八坂書房, 2009年
- ヘースティングス・ラシュドール (横尾社英訳) 『大学の起源 ヨーロッパ中世大学史 中巻』東洋館出版社, 1967年
- ステファン・ディルゼー (池端次郎訳) 『大学史 その起源から現代まで (上・下)』東洋館出版社, 1988年
- フリッツ・K. リンガー (西村稔訳) 『読書人の没落——世紀末から第三帝国までのドイツ知識人——』名古屋大学出版会, 1991年
- ドイツ連邦共和国外務省 (発行) 『ドイツの実情』2003年
- 野田宣雄 『ドイツ教養市民層の歴史』講談社学術文庫, 1997年
- 潮木守一 『近代大学の形成と変容。一九世紀ドイツ大学の社会的構造』東大出版会, 1973年
- 潮木守一 『ドイツの大学 文化史的考察』講談社学術文庫, 1992年
- 吉見俊哉 『大学とは何か』岩波新書, 2011年
- カルル・エルンスト・ラーゲ (田中宏幸, 田中まり訳) 『シュトルムの生涯と文学』芸林書房, 1991年
- 日本シュトルム協会 (編) 『シュトルム文学新論集』鳥影社, 2003年
- 宮内芳明 『シュトルム研究』郁文堂, 1993年

宮内芳明『シュトルム』清水書院, 1992年

Günter Ebersold: Politik und Gesellschaftskritik in den Novellen Theodor Storms.
Frankfurt am Main. 1981

Brian Coghlan und Karl Ernst Laage (hg.): Theodor Storm und das 19. Jahrhundert.
Berlin. 1989

Georg Bollenbeck: Theodor Storm. Eine Biographie. Frankfurt am Main. 1988

David A. Jackson: Theodor Storm. Dichter und demokratischer Humanist. Eine
Biographie. Berlin. 2001